

# 大阪まで

泉鏡太郎

青空文庫



これは喜多八の旅の覺書である——

今年三月の半ばより、東京市中穩かならず、天然痘流行につき、其方此方から注意をされて、身體髪膚これを父母にうけたり敢て損ひ毀らざるを、と其の父母は扱て在さねども、……生命は惜しし、痘痕は恐し、臆病未練の孝行息子。

三月のはじめ、御近所のお醫師に參つて、つゝましく、しをらしく、但し餘り見榮のせぬ男の二の腕をあらはにして、神妙に種痘を濟ませ、

「おとなしくなさい、はゝゝ。」と國手に笑はれて、「はい。」と袖をおさへて歸ると、其の晩あたりから、此の何年にもつひぞない、妙な不思議な心持に成る。——たとへば、擦つたいやうな、痒いやうな、熱いやうな、寒いやうな、嬉しいやうな、悲しいやうな、心細いやうな、寂しいやうな、もの懐しくて、果敢なくて、たよりのない、誰かに逢ひたいやうな、焦つたい、苛々しながら、たわいのない、恰も盆とお正月と祭禮を、もう幾つ寝ると、と前に控へて、そして小遣錢のない處へ、ポーンと夕

暮の鐘を聞くやうで、何とも以て遺瀨がない。

勉強は出來ず、稼業の仕事は抄取らず、持餘した身體を春寒の炬燵へ投り込んで、引被いでぞ居たりけるが、時々、掛蒲團の襟から顔を出して、あゝ、うゝ、と歎息して、ふう、と氣味悪く鼻の鳴るのが、三井寺へ行かうでない、金子が欲しいと聞える。……

綴蓋の女房が狭い臺所で、總菜の菠稜草を揃へながら、

「また鼻が鳴りますね……澤山然うなさい、中屋の小僧に遣つ了ふから……」

「眞平御免。」

と蒲團をすつぽり、炬燵櫓の脚を爪尖で抓つて居て、庖丁の音の聞える時、徐々々と又頭を出し、一つ寢返つて腹這ひで、

「何か甘いもの。」

「拳固……抓り餅……赤いお團子……それが可厭なら蝦蛄の天麩羅。」と、一ツづづ句切つて憎體らしく節をつける。

「御免々々。」と又潜る。

其のまゝ、うとくして居ると、種痘の爲す業とて、如何にも防ぎかねて、つい、何

時の間にか鼻が鳴る。

女房は鐵瓶の下を見かた／＼、次の間の長火鉢の前へ出張に及んで、

「お前さん、お正月から唄に謡つて居るんぢやありませんか。——一層一思ひに大阪へ行つて、矢太さんや、源太さんに逢つて、我儘を言つていらつしやいな。」  
と、先方が男だから可恐く氣前が好い。

「だがね……」

工面の悪い事は、女房も一ツ世帯でお互である。

二日も三日も同じやうな御惱氣の續いた處、三月十日、午後からしよぼくと雨になつて、薄暗い炬燵の周圍へ、別して邪氣の漾ふ中で、女房は箆笥の抽斗をがたくと開けたり、葛籠の蓋を取つたり、着換の綻を檢べたり、……洗つた足袋を裏返し  
たり、女中を買ものに出したり、何か小氣轉に立つて居たと思ふと、晩酌に乾  
もので一合つけた時、甚だ其の見事でない、箱根土産の、更紗の小さな信玄袋を座  
蒲團の傍へ持出して、トンと置いて、

「楊枝、齒磨……半紙。」

と、口のかぐりを一寸解いて、俯向いて、中を見せつゝ、

「ハンカチの洗つたの、ビスミツト、紙に包んでありますよ。寶丹、鶯懷爐、それから膝栗毛が一冊、いつも旅と云ふと持つておいでなさいますが、何になるんです。」

「道中の魔除に成るのさ。」

鶯懷爐で春めいた處へ、膝栗毛で少し氣勢つて、熱爛で蟲を壓へた。

「しかし、一件は？」

「紙入に入つて居ます、小さいのが蝦蟇口……」

と此の分だけは、鱧皮の大分膨んだのを、自分の晝夜帯から抽出して、袱紗包みと一所に信玄袋に差添へて、

「大丈夫、往復の分と、中二日、何處かで一杯飲めるだけ。……宿は何うせ矢太

さんの高等御下宿にお世話様に成るんでせう。」

傳へ聞く……旅館以下にして、下宿屋以上、所謂其の高等御下宿なるものは

——東區某町と言ふのにあつて、其處から保險會社に通勤する、最も支店

長格で、年は少いが、喜多八には過ぎた、お友達達の紳士である。で、中二日と數へ

たのは、やがて十四日には、自分も幹事の片端を承つた義理の宴會が一つあつた。

「……緩り御飯をめしあがれ、それでも七時の急行に間に合ひますわ。」

澄すました顔かほで、長煙管ながぎせるで一服いつぶくスツと吹ふく時とき、風かぜが添そつて、ぎつぎつと言いふ雨風あめかぜに成なつた。家やの内うちではない、戸外おもてである、暴模あれもやう様の篠しのつく大雨おほあめ。……

## 二

「何どうだらう、車夫わかいしゆ、車夫わかいしゆ——車くるまが打覆ぶつかへりはしないだらうか。」

俣くろまさが霞すみヶ關せきへ掛かつて、黒田くろだの海鼠壁なまこかべと云いふ昔むかしからの難所なんしよを乗のる時分じぶんには、馬うまたてが蠶がみを振ふるが如ごとく幌ほろが揺ゆれた。……此この雨風あめかぜに猶豫ためらつて、いざと云いふ間際まきはにも、尚なほ卑怯ひげふに、さて發程たつたうか、止やめようかで、七時しちじの其その急行きふかうの時期じきを過すごし、九時くじにも間まに合あふか、合あふまいか。

「もし、些ちつと急いそがないと、平常ふだんなら、何なに、大丈夫だいぢやうぶですが、此この吹降ふきぶりで、途とちう中手間てまが取とれますから。」

「可よし。」と決けつ然ぜんとし、長火鉢ながひばちの前まへを離はなれたは可いいが、餘あまり爽さわかならぬ扮装いでたちで、

「可い厭やに成なつたら引返ひきかへさう。」

「あゝ、然さうなさいましたもさ。——では、行いつて入いらつしやい。」で、漸やつと出掛でかけた。

車夫は雨風にぼやけた聲して、

「大丈夫ですよ。」

雖然、曳惱んで、ともすれば向風に押し戻されさうに成る。暗闇は大なる淵の如し。……前途の覺束なさ。何うやら九時の間に合ひさうに思はれぬ。まゝよ、一分でも乗後れたら停車場から引返さう、それがいい、と目指す大阪を敵にとつて、何うも恚うはじめから豫定の退却を畫策すると云ふのは、案ずるに懐中のためではない。膝に乗せた信玄袋の名ゆゑである。願くはこれを謙信袋と改めたい。

土橋を斜に烏森、と町もおどろくしく、やがて新橋驛へ着いて、づぶくと其の濡幌を疊んで出で、※と明る成つた處は、暴風雨の船に燈明臺、人影黒く、すたくと疎らに往來ふ。

「間に合ひましたぜ。」

「御苦勞でした。」

際どい處か、發車には未だ三分間ある。切符を買つて、改札口を出て、精々、着た切の裾へ泥撥を上げないやうに、濡れた石壇を上ると、一面雨の中に、不知火



の浮いて漾ふ都大路の電燈を見ながら、横繁吹に吹きつけられて、待合所の硝子戸へ入るまで、其の割に急がないで差支ぬ。……三分間もあだには成らない。處へ、横づけに成つた汽車は、大な黒い縁側が颯と流れついた趣である。

「おつと、助船。」

と最う恚う成れば度胸を据ゑて、洒落れて乗る。……室はいづれも、舞臺のない、大入の劇場ぐらゐに籠んで居たが、幸ひに、喜多八懐中も軽ければ、身も軽い。荷物はなし、お剩に洋杖が細い。鯨と鯨の中へ、芝海老の如く、吞まれぬばかりに割込んで、一つ吻と呼吸をついて、橋場、今戸の朝煙、賤ヶ伏屋の夕霞、と煙を眺めて、ほつねんと煙草を喫む。

……品川へ来て忘れたる事ばかり——なんぞ何もなし。大森を越すあたりであつた。

……

「もしく、此の電報を一つお願ひ申したうございます。」

列車の給仕の少年は——逢ひに行く——東區某町、矢太さんの右の高等御下宿へあてた言句を見ながら、

「え、此の列車では横濱で電報を扱ひません、——大船で打ちますから。」

と器用な手つきで、腹から拔出したやうに横衣兜の時計を見たが、

「時間外に成るんですが。」

「は、結構でございます。」

「記號を入れますよ、ら、ら、」と、紐のついた鉛筆で一寸記して、

「それだけ賃錢が餘分に成ります。」

「はいく。」

此の電報の着いたのは、翌日の午前十時過ぎであつた。

### 三

大船に停車の時、窓に立つて、逗子の方に向ひ、うちつけながら某がお馴染にておはします、札所 阪東第三番、岩殿寺 觀世音に御無沙汰のお詫を申し、道中無事と、念じ参らす。

此處を、發車の頃よりして、乗組の紳士、貴夫人、彼方此方に、フウくと空気を親嘴する音。……

誰一人、横に成るなど場席はない。花枕、草枕、旅枕、皮枕、縦に横に、硝子窓に押着けた形たるや、浮囊を取外した柄杓を持たぬものの如く、折から外のどしや降に、宛然人間の海月に似て居る。

喜多は一人、俯向いて、改良謙信袋の膝栗毛を、縞の着ものの胡坐に開けた。スチユムの上に眞南風で、車内は蒸し暑いほどなれば、外套は脱いだと知るべし。

ふと思ひついた頁を開く。——西國船の難船においらが叔父的の彌次郎兵衛、生命懸の心願、象頭山に酒を斷つたを、咽喉もと過ぎた胸忘れ、丸龜の旅籠大物屋へ着くと早や、茶袋と土瓶の煮附、とつばこのお汁、三番叟の吸もので、熱燭と洒落のめすと、罰は靦面、反返つた可恐しさに、恆規に従ひ一夜不眠の立待して、お詫を申す處へ、宵に小當りに當つて置いた、仇な年増がからかひに来る條である。

女、彌次郎が床の上にあがり、横になつて、此處へ来いと、手招きをして彌次郎をひやかす、彌次郎ひとり氣を揉み「エ、情ない、其處へ行つて寝たくてもはじまらねえ、こんな事なら立待より寝まちにすればよかつたものを。女「何ちふいはんす。私お嫌ひぢやな、コレイナアどうぢやいな。「エ、こんな間の悪い事あねえ、早く八つを打てばい、もう何時だの。女「九つでもあるかい。彌次

「まだ一時だな、コレ有様は今夜おいらは立待だから寝る事がならねえ、此處へ來な、立つて居ても談が出来やす。女「あほらしい、私や立つて居て話ノウする事は、いやく。彌次「エ、そんならコウ鐵槌があらば持つて來て貸しねえ。女「オホホ、鐵さいこ槌の事かいな、ソレ何ちふさんすのぢやいな。「イヤあの箱枕を此柱へうちつけて立ちながら寝るつもりだ。

考へると、(をかしてならん。)と一寸京阪の言葉を真似る。串戯ではない。

彌次郎が其の時代には夢にも室氣枕の事などは思ふまい、と其處等をすと、又一人々々が、風船を頭に括つて、ふはりくと浮いて居る形もある。是しかながら汽車がやがて飛行機に成つて、愛宕山から大阪へ空を翔る前表であらう。いや、割床の方……澤山おしげりなさい。

喜多は食堂へ飲酒に行く。……あの鐵の棒につかまつて、ぶるツとしながら繫目の板を踏越すのは、長屋の露地の溝板に地震と云ふ趣あり。雨は小留みに成る。

白服の姿勢で、ぴたりと留まつて、じろりと見る、給仕の氣構に恐れをなして、

「日本の酒はござんせうか。……濟みません熱くなすつて。」

玉子の半熟、と誂へると、やがて皿にのつて、白服の手からトンと湧いて、卓

ルの上へ顯れたのは、生々しい肉の切味に、半熟の乗つたのである。——玉子は  
 可い、右の肉で、うかつには手が着けられぬ。其處で、パンを一切焼いて貰つた。ポ  
 リ／＼噛みつゝ、手酌で、臺附の硝子杯を傾けたが、何故か、床の中で夜具を被つて、  
 鹽煎餅をお樂にした幼児の時を思出す。夜もやゝ更けて、食堂の、白く伽藍と  
 したあたり、ぐら／＼と揺れるのが、天井で鼠が騒ぐやうである。……矢張り旅はも  
 の寂しい、酒の銘さへ、孝子正宗。可懐く成る、床しく成る、種痘が痒く成る。  
 「坊やはいゝ兒だ寝ねしな。」……と口の裡で子守唄は、我ながら殊勝である。

## 四

息子の性は善にして、鬼神に横道なしと雖も、二合半傾けると殊勝でなく成る。  
 ……即ち風の聲、浪の音、流の響、故郷を思ひ、先祖代々を思ひ、唯女房を偲ぶ  
 べき夜半の音信さへ、窓のささんざ、松風の濱松を過ぎ、豊橋を越すや、時や、  
 經るに従つて、横雲の空一文字、山かづら、霞の二字、雲も三色に明初めて、十人  
 十色に目を覺す。

彼の大自然の、悠然として、土も水も新らしく清く目覺るに對して、欠伸をし、鼻を鳴らし、髯を搔き、涎を切つて、うよくくと柵の蠶の蠢き出づる有状は、醜く見窄らしいものであるが、東雲の太陽の恵の、宛然處女の血の如く、爽に薄紅なるに、難有や、狐とも成らず、狸ともならず、紳士と成り、貴婦人となり、豪商となり、金鎖となり、荷物と成り、大なる靴と成る。

鮫、お辨當、鯛めしの聲々、勇ましく、名古屋にて夜は全く明けて、室内も聊か寛ぎ、暖かに窓輝く。

米原は北陸線の分岐道とて、喜多にはひとり思出が多い。が、戸を開けると風が冷い。氣の所爲か、何爲もそゞろ寒い驛である。

「三千歳さん、お桐さん。」——風流懺法の女主人公と、もう一人見知越の祇園の美人に、停車場から鴨川越に、遙かに無線電話を送つた處は、然まで寢惚けたとも思はなかつたが、飛ぶやうに列車の過ぐる、小栗栖を窓から覗いて、あゝ、あすこらの敷から槍が出て、馬上に堪らず武智光秀、どうと落人から忠兵衛で、足撈取らぬ小笹原と、線路の堤防の枯草を見た料簡。——夢心地の背をドンと一ツ撲たれたやうに、そもく人口……萬、戸數……萬なる、日本第二の大都の大木戸に、色香も梅

の梅田うめだに着く。

ステツキ洋杖やうじやうと紙入かみいれと、蠶口がまぐちと煙草入たばこいれを、外套ぐわいたうの下したに一いつしよ所に確乎しつかと壓おさへながら、恭うやうやしく切符きつぷと急行券ききかうけんを二枚持にまいもつて、餘あまりの人混雜ひとごみ、あとじさりに成なつたる形かたちは、我われながら、扱さて箔はくのついたおのぼりさん。

家いえあり、妻つまあり、眷けんぞくあり、いろがあつて、金持かねもちで、大阪おほさかを一ひとのみに、ステエション場まへ前まへを、さつくと、自動車じどうしゃ、俥くるま、歩行あるのさへ電車でんしゃより疾はやいまで、猶豫たゆめらはず、十字じふじ八方はつぱうに捌さばける人數にんずを、羨うらやましさうに視ながめながら、喜多八きたはちは曠野あらのへ落おちた團栗どんぐりで、とぼんとして立たつて居ゐた。

列れつが崩くづれてばらばらと寄より、颯さつと飛とぶ俥くるまの中の、俥くるまの前まへへ漸やつと出でて、

「行くかい。」

「へい、何方どちらで、」と云いふのが、赤あから顔がほの髻ひげもじやだが、莞爾にっこりと齒はを見みせた、人ひとのよささうな親仁おやぢが嬉うれしく、

「道修町だうしうまちと云いふだがね。」

「ひや、同心町どうしんまち。」

「同心町どうしんまちではなささうだよ、——保險會社ほけんぐわいしやのある處ところだがね。」

「保險會社ちふところは澤山あるで。」

「成程——町名に間違はない筈だが、言ひ方が違ふかな。」

「何處です、旦那。」

「何ちふ處や。」と二人ばかり車夫が寄つて來る。當の親仁は、大な前齒で、唯にや

「……道は道だよ、修はをさむると、……愆う云ふ字だ。」

と習ひたての九字を切るやうな、指の先で掌へ書いて、次手に道中安全、女難

即滅の呪を唱へる。……

「分つた、そりや道修町や。」

「そら、北や。」

「分つたかね。」

「へい、旦那……乗んなはれ。」

大正七年十月







# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

初出：「新小説 第二十三年第十号」春陽堂

1918（大正7）年10月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「種痘」に対するルビの「しゅとう」と「うゑばうさう」の混在は、底本の通りです。

※表題は底本では、「大阪《おほさか》まで」となっています。

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2018年7月27日作成

2018年8月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大阪まで

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>